

研究報告

看護大学生の自律性欲求と進路選択要因および 進路意思決定上の困難さとの関連

Relationship between Need for Autonomy, Career Choice Factors, and Difficulties in Career Decision-Making among Undergraduate Nursing Students

末永弥生¹⁾ 佐藤みつ子²⁾
Yayoi Suenaga Mitsuko Sato

キーワード：看護大学生、自律性欲求、進路選択、進路意思決定の困難さ

Key words : Undergraduate Nursing Students, Need for Autonomy, Career Choice Factors,
Difficulties in Career Decision-Making

要旨

本研究は、入学直後の看護大学生を対象に自律性欲求尺度（自己決定欲求・独立欲求）、職業意思決定の困難さ尺度を用いて自記式質問紙調査を実施し、自律性欲求と進路選択要因および進路意思決定上の困難さとの関連を明らかにした。その結果、「両親」、「身近な人の病気や入院」、「看護師の働く姿」などの経験や看護職との出会いに影響を受け、「資格を取る」、「専門性を身につける」を動機とし、入学直後は66.7%の学生が「看護職に就く」と多かったが、卒業後の職業は未決定が49.2%で、他者から影響されることを拒否し独立したい「独立欲求」が高かった。一方、決定している学生は、自分の興味や価値を反映して行動決定しようとする「自己決定欲求」が高かった。また、進路意思決定の低下要因には、「能力面の不安」等、の困難さが関連していることが明らかになり、未決定の学生には、自分の抱える課題を自覚できるようガイドラインや意思決定の相談を受ける必要がある。また将来の自己像を描かせることや職業を通して社会にどのように寄与していきたいか等、職業観を持つことの意味や生き方についても考える機会をつくるなどキャリア教育の強化の重要性が示唆された。

I. 研究の背景

青年期後期に位置づけられる大学の4年間は、エリクソン（1959）が提唱した自我同一性の形成が重要な発達課題とされており、その同一性形成の過程において職業が最も重要な役割を果たしているため、青年期に職業を選択することは、社会に参加していくためにも不可欠な要素である（鏑・山本・宮下、1996）。

文部科学省の学校基本調査によると、現代の大学生のコミュニケーション能力、問題解決能力、社会的常識などの基本的な能力の低下や職業観形成の未熟さ、精神的・社会的自立の遅れなどの要因から、進路意識や目的意識が希薄なまま進学する学生が増加しているという報告がある（文部科学省、2011b）。また、本来ならば、自律的に学習活動を行う大学生が、学校から与えられるもの、

1) 国際医療福祉大学 International University of Health and Welfare

2) 山梨大学名誉教授 University of Yamanashi

示される課題などを依存的、他律的にこなすだけという「大学生の生徒化」現象も問題とされている（伊藤、1999）。

このような変化は、看護大学生においてもみられ、志望動機が不明確のまま他者に勧められ入学してくる学生や、学業を何とか継続しても職業決定ができない学生、さらには、看護を自分の将来の職業と捉えることができないまま就職をする学生がいるとの報告もある（山内・松本・山本、2009）。この背景には、学生自身の内面的な変化だけでなく、厳しい雇用状況や個々の働き方の変化などに対する大学側の教育や学生支援が不十分という指摘もあり、大学教育の在り方を議論していた中央教育審議会においても、学生支援の充実や職業指導を明確化する方向性を打ち出していた（文部科学省、2008）。そして、2011年に文部科学省は、設置基準を改正し、教育課程にキャリアガイダンス（進路指導）を盛り込むことを義務化し、大学側は「生涯学ぶ習慣や主体的に考える力を持ち、予測困難な時代の中で、どんな状況にも対応できる多様な人材の育成」をめざし、カリキュラムや就職活動などの支援体制の見直しに入った（文部科学省、2011c）。

看護基礎教育においては、2011年のカリキュラム改正（厚生労働省、2011）や2011年の看護教育モデル・コア・カリキュラムの趣旨（文部科学省、2011a）において、「看護専門職として質の高い看護を提供できる実践能力の育成の必要性」、「看護専門職として、自律的に生涯にわたって研鑽し続ける姿勢をもつこと」などが示された。特にモデル・コア・カリキュラムでは、看護職として求められる資質の中核にプロフェッショナリズムを置き、「一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育むために、進路指導・キャリア教育の視点に立った授業改善や体験活動、評価改善の推進やガイダンスとカウンセリングの充実、それに向けた学校内外の組織的体制に必要な知識や素養を身に付ける」必要性が述べられている。換言すれば、知識と根拠に裏付けられた判断力はもちろんのこと、自分の行動や目標を自己

の興味・関心に基づいて自己決定できる「自律性（autonomy）」の形成は看護専門職の基盤となるものであり、その自律性を高めるための教育的支援が看護基礎教育に求められていると考える。

人は行動を自ら生起し、行動を決定したいという自律性の欲求を本質的に持っており（安藤、2003）その動機づけ理論の一つに自己決定理論（Self-determination theory: Deci & Ryan, 1985 Ryan & Deci, 2000）がある。自己決定理論は、従来、対立して捉えることの多かった「内発的動機づけ」と「外発的動機づけ」を総合的に捉え、動機づけを「外発的動機づけ」から「内発的動機づけ」までの自己決定の程度という連続体としてとらえようとするものである。これらの欲求が満たされることによって、活動の価値が内在化され、より自己決定の程度の高い動機づけをもつと仮定されている。この自己決定理論の枠組みに基づいて安藤（2007）は、動機づけの基本的な心理的欲求の一つである「自律性欲求」を測定する尺度を作成し、短期大学生を対象に、自律的な動機づけをもつ者ほど、進学する大学を自己決定していることを明らかにしている。一方で、青年期において進路を決めることは重要なライフ・イベントであるため、なかなか意思決定できずに悩む学生も少なくない。そこで若松（2001）は、教員養成学部の学生を対象として進路意思決定における困難さを検討し、進路未決定者は「自らの「興味や好み」について核心が持てない」、「情報や答えが得にくい問題に悩まされている」、「自らの抱える問題が何なのかを理解できていない」など、対象者のもつ傾向が意思決定に影響していることを明らかにしている。

看護学生の自律性に関する先行研究は少なく、自分の意思で物事を選択し、行為を統制することができるという「自律性の発達度合い」について、看護学生と非看護系学生を比較し、入学時の看護大学生は看護を学ぶ大学という環境の中に入り、知識だけではなく専門職としての技術も求められる学習の場に直面し、自己を律してうまくやっという気持ちや揺らいでいるとの報告や（中新ら、2005）、看護学生の精神看護学実習にお

ける自律性の特徴として、「抽象的判断能力」、「認知能力」、「具体的判断能力」が、実習後に有意に高まったとの報告（水落・日下・高橋、2015）が数件ある。このように、看護大学生の自律性の発達度合いや臨地実習が自律性を育成する機会となるといった示唆は得られているものの、学生の自律性は何によって高まりあるいは低下するのか、その影響要因について明らかにされていない。自分が将来就く職業に向けて、自律的に活動できない学生への支援は教育上の課題であるため、学生の自律性の特徴とそれに影響する要因を明らかにする必要があると考える。

看護基礎教育は専門性の高い課程であり、大学での学習や資格が職業選択に直接的に関連しているため卒業後は看護職に就く者が多い。しかし、筆者は、看護教員としての経験から、4年間の学生生活を自分の目標に向かって行動し、看護について積極的に学習する学生がいる一方で、入学後の学習に意欲がもてず、卒業目前になっても自分の就く職業を決定できない学生がいることに問題を感じている。一般的に大学への進学を決める場合、多くの大学から志望校を決定し受験をすることになる。大学進学に対して自律的に動機づけられている場合には、卒業後の職業決定に際しても自律的にかかわれるのではないかと考えた。前述した学生の多くは、自律性の未熟さと意思決定時の困難さが影響を与えているものと思われる。自律性の未熟さとは、自己決定（自分の行動や目標を自己の興味・関心に基づいて決定すること）を動機づける心理的欲求が低い状態をさし、意思決定の困難さは、卒業時に就きたい職業を決定する過程において、自分はどのような職業に就きたいのだろうか、自分の能力で看護職を担えるかといった迷いや不安など本人が自覚できる困難さをいう。

本研究では、入学時の看護大学生の自律性の特徴と進路意思決定上の困難さを明らかにし、看護大学生の自律性の特徴を踏まえた教育支援方法についての示唆を得ることで、看護教育に求められているキャリア教育に活用できると考えた。

II. 研究目的

入学直後の看護大学生の自律性欲求と進路選択に影響を与えた要因、および進路意思決定上の困難さとの関連を明らかにし、職業選択や進路意思決定における教育的支援への示唆を得る。

【用語の操作的定義】

- 1) 看護職：保健師、助産師、看護師とする。
- 2) 進路：看護大学に進学すること
- 3) 職業選択：看護大学卒業時に職業（看護師・保健師）を選択すること。
- 4) 自律性欲求：安藤（2003）の考えを採用し、行動を自ら生起させたい、行動を決定したいという欲求（自己決定と独立で構成する）とする。

III. 研究方法

1. 研究対象

関東圏および東北地方の看護系大学2校に入学直後（1～2か月）の看護学生176名を対象とし、自記式質問紙調査を実施した。調査時期については、大学生活での影響が少ない入学直後（1～2か月）とした。

2. 調査内容

- 1) **基本的属性**：年齢、性別、看護職をめざした時期と進路選択時の志望動機の項目である。
- 2) **進路選択の影響要因**：進路選択に影響を与えた人、情報、出来事、卒業時の職業選択の有無、の項目である。
- 3) **自律性欲求について**

安藤（2003）が作成した尺度（ α 係数.83）を用いる。この尺度は、自らの行動を決定し、起こしたいという自律性欲求の個人差を測定するものである。個人の興味や価値を反映して行動を決定し自己決定しようとする「自己決定因子」と、他者から影響されることを拒否し、独立した個人であろうとする「独立因子」で構成される。下位尺度24項目で構成され、「全くあてはまらない1点」から「とてもよく当てはまる5点」の5段階の得点を配して回答を求める。得点が高いほど、当該項目について強い欲求をもつと評価し、得点が低いほ

ど欲求が低いと判断する。

4) 進路意思決定の困難さについて

若松(2001)が作成した尺度 (α 係数.949)を用いる。大学生が進路意思決定において抱える困難さを測定するものであり、未決定者が自分の抱える課題を自覚できているか否かのガイドラインや意思決定、相談・処遇の進み具合を見るものとしても使用できる。志向する進路の模索(自分はどのような方向の進路に最も強く興味を持っているのだろうか)、能力面の不安(自分の能力は、その進路が必要とするくらいまで伸びるのだろうか)、進路先の実情への不安(その進路の特徴や性質は、将来変わってしまうのではないか)、現在の自分の状況との葛藤(これから選べる進路について、どうしてもしたら正確で最新の情報が得られるのだろうか)の下位尺度38項目で構成され、「全然悩まされなかった1点」から「すごく悩まされた6点」の6段階の得点を配し回答を求める。得点数が高いものほど、「悩まされている」、または「悩まされていた」と判断する。

3. データ収集の方法

関東圏内および東北地方にある2大学の学長および学科長に電話で研究の趣旨を説明した後、研究説明書を郵送し同意を得た。調査票は自記式無記名の質問紙調査用紙を作成し、研究説明書と共に協力校に郵送した。各校の教員に協力を得て、文書と口頭で研究の趣旨を説明後、研究対象者の同意を得た上で調査表を配布してもらった。質問紙調査には依頼文書と個々に密封できる封筒をつけ、回答後に封筒に入れて各自で投函してもらった。調査期間は、平成28年4月15日～平成28年5月15日とした。

4. 倫理的配慮

国際医療福祉大学大学院医学福祉研究科の研究倫理審査会より承認を受け、対象者には研究の趣旨、研究で知り得た個人情報の守秘、データの匿名化処理、研究参加・不参加の自由などについて文書と口頭での説明を協力校の教員に依頼し、研

究参加の同意を得た。また、プライバシー、匿名性、秘密を保持するために、個別で封筒に入れた後、各自でポストへの投函を依頼した。本研究での自律性欲求尺度および進路意思決定の困難さ尺度の使用にあたり、開発者に連絡し許可をいただいた。

5. 分析方法

対象者の属性、志望動機、進路選択、職業選択に影響を与えた要因の質問項目は、単純集計を行った。入学直後の看護大学生が考える「卒業時の職業選択」について、「決定群」と「未決定群」の2つに分けた名義尺度、自律性欲求の2つの下位尺度を間隔尺度とし、平均値の差を比較した。尺度の信頼性の検討、記述統計(平均、標準偏差、 χ^2 乗検定、t検定)には、SPSS Status24 Windowsを使用した。

IV. 結果

調査協力に同意の得られた看護大学2校の入学直後の看護大学生65名より回答を得た(回収率37%)、有効回答数は59名(91%)であった。

1. 対象者の背景

対象者の平均年齢は18.9歳(±標準偏差)で、女子学生が54名(91.5%)、男子学生が5名(8.5%)であった。

2. 看護師の志望時期と大学の志望動機

1) 志望時期と志望動機

「看護師の志望時期」について表1、「看護大学の志望動機」について上位4項目を表2に示した。看護師の志望時期は、高校生25名(38.5%)が最も多く、次いで小学生22名(33.8%)、中学生15名(23.1%)、社会人2名(3.1%)、その他1名(1.5%)であった。

志望動機は、「資格を取得したい」44名(67.7%)、次いで「専門性を身につけたい」24名(36.9%)、「自分の夢や希望を叶えたい」22名(33.8%)、「自分の興味・適性を考えた」14名(21.5%)であった。

表1 看護師の志望時期 N=59(複数回答)

項目	人数	%
高校生	25	38.5
小学生	22	33.8
中学生	15	23.1
社会人になってから	2	3.1
その他	1	1.5

表2 看護大学の志望動機 N=59(複数回答)

項目	人数	%
資格を取得したい	44	67.7
専門性を身に着けたい	24	36.9
自分の夢や希望を叶えたい	22	33.8
自分の興味・適性を考えた	14	21.5

2) 看護大学への進路選択時の影響要因

「進路選択時の影響要因」は、①周囲の人、②情報、③出来事の各上位4項目を表3に示した。進路選択時に影響をうけた「周囲の人」では、第1位両親(67.8%)、第2位近親者の看護師(15.3%)、教師(15.3%)、第3位影響を受けた人はいない(10.2%)であった。次に、「情報」では、第1位インターネット(57.6%)、第2位テレビ・ドラマ(23.7%)、第3位書籍(22.0%)、第4位ニュース(20.3%)であった。「出来事」では、第1位身近な人の病気・入院経験(42.4%)、看護師の働く姿を見て(42.4%)、第2位自分の病気・入院経験(33.9%)、第3位家族の看護経験(25.4%)であった。

表3 進路選択時の影響要因 N=59(複数回答)

要因	項目	人数 (%)
周囲の人	1. 両親	40 (67.8)
	2. 近親者の看護師	9 (15.3)
	教師	9 (15.3)
	3. 影響を受けた人はいない	6 (10.2)
情報	1. インターネット	34 (57.6)
	2. テレビ・ドラマ	14 (23.7)
	3. 書籍	13 (22.0)
	4. ニュース	12 (20.3)
出来事	1. 身近な人の病気・入院経験	25 (42.4)
	看護師の働く姿を見て	25 (42.4)
	2. 自分の病気・入院経験	20 (33.9)
	3. 家族の看護経験	15 (25.4)

3. 卒業時の進路

「卒業時の進路」については表4に示した。卒業時に就きたい職業について、「決定している(決定

群)」30名(50.8%)、「決定していない(未決定群)」29名(49.2%)であった。決定群の職業は、看護師20名(66.7%)、助産師6名(20.0%)、保健師1名(3.30%)、その他養護教員3名(10.0%)であった。

表4 卒業時の進路 N=59

項目	人数	%
決定群	30	50.8
未決定群	29	49.2
合計	59	100

4. 卒業時の職業選択(決定・未決定群)と看護大学への進路選択時の影響要因との関連

「卒業時の職業選択」と「看護大学への進路選択時の影響要因」について表5に示した。卒業時の職業選択の有無と看護大学への進路選択時の影響要因の平均値(±標準偏差)をみると、「決定群」は「自分の病気・入院経験」0.34(±0.49)、「身近な人の病気・入院経験」0.34(±0.48)、「家族の看護経験」0.28(±0.46)、「看護師の働く姿を見て」0.38(±0.49)、「身近な人の死の経験」0.24(±0.44)、「中学・高校の1日看護体験」0.31(±0.47)、「自然災害などの経験」0.10(±0.31)、「ボランティア活動」0.17(±0.38)、「未決定群」では、「自分の病気・入院経験」0.33(±0.48)、「身近な人の病気・入院経験」0.50(±0.51)、「家族の看護経験」0.23(±0.43)、「看護師の働く姿を見て」0.47(±0.51)、「身近な人の死の経験」0.13(±0.35)、「中学・高校の1日看護体験」0.53(±0.51)、「自然災害などの経験」0.07(±0.25)、「ボランティア活動」0.00(±0.00)であった。

表5 卒業時の職業選択と看護大学への進路選択時の影響要因 N=59

影響要因	決定群 平均値(±SD)	未決定群 平均値(±SD)	χ ² 検定
自分の病気・入院経験	0.34(0.49)	0.33(0.48)	0.93
身近な人の病気・入院経験	0.34(0.48)	0.50(0.51)	0.24
家族の看護経験	0.28(0.46)	0.23(0.43)	0.71
看護師の働く姿を見て	0.38(0.49)	0.47(0.51)	0.51
身近な人の死の経験	0.24(0.44)	0.13(0.35)	0.30
中学・高校の1日看護体験	0.31(0.47)	0.53(0.51)	0.09
自然災害などの経験	0.10(0.31)	0.07(0.25)	0.62
ボランティア活動	0.17(0.38)	0.00(0.00)	0.02

Note: χ²検定 *p<0.05

卒業時の職業選択と進路選択時の影響要因との関連性をみるためにχ²検定を行ったところ、ボラ

表6 看護大学生の自律性欲求と関連要因

N=59

	項目	平均値 (±SD)	決定群平均値 (±SD)	未決定群平均値 (±SD)	t 値
自己決定欲求	1. 自分で決めたことをやる方が、やる気がでる。 (2). 自分で何でも決めるよりも、他の人に考えてもらいたい。 (3). 他人に決めてもらった方が安心できる。 4. 自分で決めたことは、責任を持つと思う。 5. 自分が興味を持ったことは、一生懸命やることができる。 (6). 楽なので、他の人の言うことを聞こうと思う。 (7). 自分が何をしたらよいか考えるのは面倒だ。 (8). 大事なことは、だれか他の人に決めてもらいたいと思う。 9. 自分のことは自分で決めたいと思う。 (10). 他人のいうことに従うことが多い。 (11). 自分ひとりの判断でものごとを決めるのは好きではない。 12. 常に自分自身の意見を持つようにしている。 (13). 何かをやるときには、他の人の意見に合わせようと思う。 14. 自分でいろいろ考えて行動するのが好きだ。	4.00 (±6.39)	4.07 (±5.69)	3.92 (±6.95)	0.20
独立欲求	1. 自分のは、他人に決められたくない。 2. 周りから反対されても、自分がやりたいことをしたいと思う。 3. 周りの人に合わせて自分の行動を変えたくない。 4. 他人に対して、自分の意見をいつもはっきり言う。 5. 他人の誰かに指図されるのは嫌だ。 6. 他人と意見が対立したときには、自分の意見を通そうとする。 7. 自分でいいと思うのなら、他人の意見は気にしない。 8. 自分と他人の意見が違うときには、自分の考えを通したい。 9. 他人の指示に従うのは、好きではない。 10. 他人の言うことがたとえ正しくても、反論したくなる。	2.81 (±6.79)	2.69 (±6.82)	2.94 (±6.65)	0.16

Note: t 検定

() は逆転項目を示す

ンティアの経験「無」が「有」より有意に高かった (P<0.05)。

5. 看護大学生の自立性欲求と関連要因

看護大学生の自律性欲求と関連要因について表6に示した。本研究対象者の自律性尺度の信頼性は、「自己決定欲求」は(α係数.79)、「独立欲求」は(α係数.81)であった。自律性欲求尺度の総合平均点は、842点、最小得点57点、最高得点114点であった。また、2つの下位尺度の平均値(±標準偏差)はそれぞれ、「自己決定欲求」4.00(±6.39)、「独立欲求」2.81(±6.79)であった。

卒業時の決定群と未決定群に自律性欲求の平均値得点をみると、自律性欲求の「自己決定欲求」では決定群4.07(±5.69)、未決定群3.92(±6.95)であった。「独立欲求」では、決定群は2.69(±6.82)、未決定群2.94(±6.65)であった。

次に看護大学生の自律性欲求と関連要因について平均値の比較を行ったところ、有意差は認められなかった。

次に、「自律性欲求と進路選択時の影響要因の関連」について表7に示し、「自律性欲求と将来めざす職業との関連」について表8に示した。「自己決

定欲求」と「進路選択時の影響要因」との関連性をみるためにχ²検定を行ったところ、「漫画」に有意差がみられた(P<0.05)。さらに、「独立欲求」と「進路選択時の影響要因」との関連性では「将来専門看護師をめざす」に有意差が認められた(P<0.001)。

表7 自律性欲求と進路選択時の影響要因の関連 N=59

	インター ネット	テレビ・ ドラマ	書籍	ニュース	漫画
自己決定欲求	0.61	0.14	0.18	0.18	0.02
独立欲求	0.70	0.35	0.68	0.80	0.14

Note: χ²検定

*p<0.05

表8 自律性欲求と将来めざす職業との関連 N=59

	保健師	助産師	専門看護師
自己決定欲求	0.97	0.33	0.20
独立欲求	0.31	0.42	0.00

Note: χ²検定

***p<0.001

6. 看護大学生の進路意思決定上の困難さとの関連要因

進路意思決定の困難さと職業決定・未決定群による比較を表9に示した。本研究対象者の進路意思決定下位尺度の信頼性を Cronbach のα係数に

表 9 進路意思決定の困難さと卒業時の職業決定・未決定群による比較

N=59

下位尺度	項目	平均値 (±SD)	決定群平均 値(±SD)	未決定群 平均値(±D)	t 値
進路先の実情への不安	その進路先の人たちとうまくやっていると出来るだろうか。 その進路では私の優れた面や大学で学んだことが活かせるだろうか。 その進路は本当に私の好みを実現してくれるだろうか。 その進路先ではどんなことをする(させられる)のだろうか。 その進路の特徴や性質(先進的、民主的、安定しているなど)は、将来変わってしまうのではないだろうか。 ふつう、その進路に進んだ後はどのようなコースをたどることになるのだろうか。 今の大学・学部・専門は、目指す進路からすると不利なところではないだろうか。	3.90 (±6.87)	3.78 (±6.64)	4.02 (±7.14)	0.507
能力面の不安	その進路は本当に私の能力に合っているのだろうか。 私はどんな能力を持っているのだろうか。 私が自分で持っていると思う能力は、本当に他の人たちよりも優れているのだろうか。 私の能力は、その進路が必要とするくらいまで伸びるだろうか。 自分では向いていると思う進路に、本当に向いているのだろうか。 私とその進路に進める可能性はどのくらいありそうだろうか。 自分の能力が不十分と思えても、その進路を選ぶべきだろうか。 その進路に進んだらどんな資質が求められる(必要とされる)のだろうか。	3.38 (±9.43)	2.95 (±9.28)	3.45 (±9.70)	0.684
進路選択の方法についての戸惑い	良い進路選択をするにはどんなことを考慮に入れなくてはならないのだろうか。 良い進路選択をするにはどんな手順を踏まなくてはならないのだろうか。 自分自身についての情報をもっと手に入れるにはどうしたらよいのだろうか。 これから選べる進路やその特徴について、どうしたら正確で最新の情報が手にいれられるのだろうか。	3.15 (±4.95)	2.92 (±4.37)	3.12 (±5.37)	0.162
志向する進路の模索	どんな進路に私は向いているのだろうか。 どんな進路に私は最も向いているのだろうか。 その進路は私が持っている興味や意欲と本当に合ったところなのだろうか。 将来、もっと自分に合った進路の選択肢が現れるのではないだろうか。 自分が進路に対して持っている好みは将来変わるのではないだろうか。 自分が進むことのできる進路にはどんなものがあるだろうか。 私が何に興味や意欲を持つかということは将来変わってしまうのではないだろうか。 進路に対する私の好みのうちどれを最も優先するべきだろうか。 私はどのような方向の進路に興味がある(意欲を感じる)のだろうか。 私はどのような方向の進路に最も強く興味をもっている(意欲を感じる)のだろうか。 自分は進路に対してどんな好みがあるのだろうか。	2.89 (±12.3)	2.84 (±13.5)	2.94 (±11.1)	0.738
現在の自分の状況との葛藤	採用される(合格する)可能性があまりなくとも、その進路を選ぶべきだろうか。 自分にとって不都合な土地に行くことにあるその進路でも、選ぶべきなのだろうか。 もし私が進んだ進路に向いていなくても、いずれ自分は変わって出来るだろうか。 私から見て向いていないように思えても、その進路を選ぶべきだろうか。 たくさんの時間とエネルギーが必要になるにもかかわらず、その進路を選ぶべきだろうか。 進路に対する私の好みを実現されなくても、その進路を選ぶべきだろうか。 興味や意欲が持てないその進路でも選ぶべきなのだろうか。 進路の計画を立てる上で、性や年齢などによる差別をどうやったら克服できるだろうか。	2.67 (±8.50)	2.63 (±8.33)	2.72 (±8.80)	0.780

Note: t 検定

より求めたところ、「進路先の実情への不安」は(α 係数.849)、「能力面の不安」は(α 係数.916)、「進路選択の方法についての戸惑い」は(α 係数.899)、「志向する進路の模索」は(α 係数.942)、「現在の自分の状況との葛藤」は(α 係数.878)、であった。

意思決定の困難さの下位尺度「進路先の実情への不安」の平均値(±標準偏差)は 3.90(±6.87)、「能力面の不安」3.38(±9.43)、「進路選択の方法についての戸惑い」3.15(±4.95)、「志向する進路の模索」2.89(±12.3)、「現在の自分の状況との葛藤」2.67(±8.50)であった。

卒業時の職業選択の有無で平均値をみると、「決定群」での「進路先の実情への不安」3.78(±6.64)、「

能力面の不安」2.95(±9.28)、「進路選択の方法についての戸惑い」2.92(±4.37)、「志向する進路の模索」2.84(±13.5)、「現在の自分の状況との葛藤」2.63(±8.33)に比べて、「未決定群」の「進路先の実情への不安」4.02(±7.14)、「能力面の不安」3.45(±9.70)、「進路選択の方法についての戸惑い」3.12(±5.37)、「志向する進路の模索」2.94(±11.1)、「現在の自分の状況との葛藤」2.72(±8.80)であった。

次に、卒業時の職業選決定群と未決定群別に進路意思決定の困難さの 5 つの下位尺度について平均値の比較を行ったところ、有意差は認められなかった。

VI. 考察

1. 進路に関する看護大学生の特徴

1) 看護師の志望時期・看護大学への志望動機

看護師の志望時期は、高校生、小学生、中学生の順であった。西山ら(西山・大室・鈴木・合田・細越、2004)が全国の看護師養成所に在籍する1年生1,297名に行った調査と本研究を比較すると、進路を決定した時期が高校生、中学生、小学生の順であり、本研究の方がやや早期化している傾向がみられた。早期化している要因は、近年、小学生からキャリア教育が推進され実践していることや、多くの高等学校において、入学後早期から進路ガイダンスや看護大学教員等による模擬授業の導入がされており、職業について考える機会が多くなっていることがあげられる。

看護大学の志望動機は、「資格をとりたい」、「専門性を身に着きたい」が1~2位と上位であった。志望動機については多くの先行研究がみられ、古市(1993)による10学部(教育系・文学系・法経系・理工農系・医歯薬系)の大学1・2年生を対象とした調査では、教育系と医歯薬系の学生が資格・就職志向が強いと考察している。また、淵上(1984)は高校3年生を対象として大学進学志望動機の因子分析を行い、専門知識を深める、自分の可能性を求める「大学の本来の機能」、親からの勧めといった「家族への配慮と規範機能」などの5因子を抽出している。

本研究の結果は、淵上の研究結果と類似する傾向がみられた。しかし、古市、淵上の研究は20年前の研究であり、1990年代の景気後退以降の失業率の上昇やフリーター問題など、若者の就業をめぐる状況が大きく変化している。また職業意識も物質的豊かさや安定を求め、終身雇用に価値を置いた高齢者世代に対して、現代の若者はめざす会社に入ることが目的ではなく、入った会社で「自分の力は活かせるのか」「その会社ではどんな仕事ができるのか」といった自己実現志向に変化していると考えられる。今回の調査で得られた進学志望動機の第1位~第2位である資格がとりたい、専門性を身に着きたいといった結果においても、

自分の力を仕事で発揮したいという、看護大学生の自己実現志向や職業に対する意欲が表れていると考える。一方、資格がとりたい、専門性を身に着けたいということは「自分がやりたいこと」であり、「その職業に就くことでやれること」ではないとの解釈も可能と考える。これは、「働くこと」の意味の理解不足や、自分がめざす職業のイメージが、その職業の具体的な理解に至っていないとも考えられ、就職後にその職業の実態や厳しさに直面することで、職業そのものへの興味・関心の低下や自分に合った仕事を探し離職につながることも考えられる。

2) 看護大学生における進路選択時の影響要因

大学生の職業決定に関わる研究では、両親を望ましいモデルとして認知している大学生は職業未決定状態が低く、決定回避傾向が弱いことや(鹿内、2006)父親、母親、教師など、どのような人に影響を受けたと認知するかによって、「大学の本来の機能」や「家族への配慮」など、職業決定時に重視する事柄が違うといった人的影響源が明らかにされている(淵上、1984)。本研究における対象者の約7割の学生が、両親に影響を受けて進路選択をしており、約5割が卒業後の職業選択が未決定という結果であった。鹿内の示した「両親を望ましいモデルとして認知している大学生は職業未決定状態が低い」という結果と比較すると、本研究における約2割の学生は「曖昧なままの進路選択」であった可能性が考えられた。また、身近な人や自分自身の経験や、看護師の働く姿を目にする経験が進路選択に影響を与えており、ロールモデルの存在の大きさが示された。理想像としてのロールモデルを持つことにより、めざす方向性が明確にでき、自分が何をすべきかイメージができるようになるといったメリットがあるが、そうでない場合は、山内ら(2009)が指摘するように志望動機が不明確のまま他者に勧められ入学してくる学生の存在につながり得ると考える。

また、進路選択時の情報として、西山ら(2004)の調査では、看護師養成校で実施するオープンキャンパス等が4割を占め、次いで学校紹介パンフ

レット、高校教諭、雑誌、家族・先輩・友人という報告であった。本研究では、西山らの調査結果に加え、インターネットからの情報収集が約6割弱、テレビ・ドラマが2割強という特徴がみられた。最近では受験に限らず就職活動などの情報収集や問い合わせのほとんどがインターネットを介して行われており、OB・OGとの接触を行う学生は減少傾向にある(永野・根本・木谷、2001)。先輩の経験を見聞きする経験は、自らのキャリアを意識することや行動を起こそうとする動機づけになると思われる。

3) 卒業時の職業選択と看護大学への進路選択の影響要因との関連

「卒業時の職業選択が未決定のもの」は、「卒業時の職業選択が決定しているもの」よりボランティア活動の影響を多く受けていた。近年、小学生から実践的な活動を体験させ、生きる力を伸ばそうとする試みや、中学生や高校生に対して、職業体験やキャリア教育などを行い、体験を通して職業に対する意識を高めようとする取り組みが盛んになっている(文部科学省、2012a、2012b)。青年期は、身体的、精神的に急激な変化・成熟がみられると同時に自己を確立し始め、社会人としての基礎を完成する時期である。このような時期においてボランティア活動に取り組むことは、他者との関わりを通し、社会との関係において自己の存在を考えるきっかけとなると考える。

本研究の結果でみられた「卒業時の職業選択が未決定ものとボランティア活動」の関連については、単に自分が何をしたいのかが不明確のために「未決定」ということも考えられるが、インターシップやボランティア活動などの社会活動を通して、自己効力感の向上、自己理解の促進、自己評価の視点の獲得、自己内の意識と社会に関する意識の変容(小林・酒井、2006)が起こることによって、将来を熟考している時期とも捉えられる。

また、大学によっては看護師に加え、助産師、保健師の資格を取得できるため、入学時の段階では決定していない学生もいると考えられる。この場合においても、先に述べた看護大学進学

の動機や目的意識など対象学生の特性をとらえ、自身の将来を考えていけるような働きかけが重要であると考えられる。

4) 看護大学生の自律性欲求の特徴

自律性欲求と進学動機づけ、進学先自己決定との関連について、短期大学生1年生115名を対象に検討した安藤(2008)の調査では、自律性の低い進学動機づけを持つ場合には大学を自己決定しない傾向にあり、自律性欲求に関しては、自己決定欲求が進学動機づけを媒介して進学先自己決定に影響すること、独立欲求と進学動機づけには有意差がなく、自身の進学動機づけの高低とは独立に自己決定を希有するためであると報告している。本研究では、卒業時の職業決定の有無と自律性欲求の比較に有意差が認められなかったが、自律性欲求については、卒業時の職業選択決定群は、「自己決定欲求」が高く、未決定群は「独立欲求」が高いという結果がみられた。これは、“自分で考えて決定したい”という自律性の欲求が高い、つまり看護職に就くという目的を持ち意思決定をして入学している学生が多いものと思われ、安藤の言う「進学に対して自律的な動機づけを持つほど、進学する大学を自己決定している」という結果を支持するものとなった。また、未決定群に「独立欲求」が高くみられたのは、“他者に従わずに決定したい”つまりは“妥協を許さない”、“他者を認めない”という欲求でもあるため、自ら意思決定し入学したとしても、他者の意見よりも自分の考えを重視するといった傾向が見えてきた。

さらに、「自己決定欲求」と漫画、「独立欲求」と将来の資格(専門看護師)取得の関連がみられた。現代青年の進路に関する情報収集の方法や職業に関する理解は、テレビ・ドラマや雑誌、インターネットなどのメディアから影響を受けてつくられる部分が少なくないと思われた。

また、卒業時の職業選択について示したように、看護師をめざす中においても5割の学生が卒業時の職業選択が未決定であったことから、職業選択に関する迷いを抱えていると思われる。高校での進路選択には時間的な制約もあり、その決定が大

学入学後の生活や卒業後の職業選択に影響する可能性も予測される。自分の意志による決定を引き受けられるためには、学生個々のキャリア意識向上に向けた支援が重要であると考えられる。

5) 看護大学生の進路決定群・未決定群と進路意思決定上の困難さの特徴

進路意思決定の困難さについては、卒業時の決定群と未決定群では、有意差は認められなかった。しかし、両群においても、学生は能力面の不安や自分ほどの方向に興味を持っているのか等、志向する進路へ模索し、進路決定の困難さを強く感じており、高校から大学進学を経てもなお、進路意思決定上での困難さを抱えている状態であることが予測された。

2. 看護大学生の職業選択および進路意思決定における教育的示唆

看護大学の入学生は、看護職を専門性が高く将来的に多くの可能性がある職業と認識し、看護することの意味を考えている者が多い傾向にあるといわれており（竹本、2009）、（村中・浦島・青木・渋谷、2002）、多くの学生が「看護師になりたい」という動機づけをもって入学している。本研究の結果においても、同様の目的意識をもっているものが多く、「資格をとりたい」、「専門性を身につけたい」といった動機をもっているものは自己決定欲求が高く、卒業時の職業選択につながっていた。

その一方で、「働くこと」の意味や、自分がめざす職業の具体的なイメージがつかず、入学時の約5割の看護大学生において、卒業後の職業が決定していないこと、職業選択について自身の志向する進路の迷いや自分の能力面の不安など、社会に出ることに対する困難さをもっていることが明らかとなった。このような看護大学生の職業選択や進路意思決定においては、自分自身が将来就く職業についても目的意識を明確に持てるような支援が重要である。現在8割の大学が実施しているキャリアガイダンスや、6割強の大学が設定している「キャリア科目」においてなど（望月、2017）、経済・社会・雇用等の基本的な仕組みについての

知識と将来就こうとする看護職の実態や厳しさなどをもとに、自己の将来像や、その職業を通してどのように社会に寄与していきたいかなども深く思考する機会をつくる必要がある。

また、大学選択の過程においては、約7割の学生が両親に影響を受けているという特徴が示され、看護大学生の進路意思決定における教育的支援の検討においては、「両親に影響を受けて大学選択をした学生の意思決定のプロセス」を把握する必要性も示唆された。

さらに、本研究の結果、ボランティア活動は学生の職業や社会に対する意識に少なからず影響していることがわかった。文部科学省調査（2017）によると、ボランティア活動を取り入れた授業科目数は2008年度315大学から2015年度の444大学と報告されており、教育的な意義が注目されている。知らない他者とのつながりや実践を伴う体験を、自らの将来について考えていくための興味や関心を育成する力や人間的成長の場としてとらえ、看護学生にも意義を伝え体験できる環境を整えていくことが、キャリア教育方法のひとつであることと考える。

看護学生が入学時に持っている「看護師になりたい」という目的意識を低減させないためには、看護に対する興味・関心を喚起し看護職について考え、専門職業人としてのキャリアアップや社会貢献の意義・価値を見いだせるような講義・演習・実習を通じた教育内容・方法の工夫が何よりも重要であると考えられる。

Ⅶ. 結論

1. 進路選択の影響要因には、「両親や身近な人の病気、入院」「看護師の働く姿」など、経験や看護職との出会いが多かった。
2. 看護大学への志望動機は、「資格を取ること」や「専門性を身につけること」が多かった。
3. 入学直後は66.7%の学生が「看護職に就く」と回答しているが、卒業後の進路は49.2%の者が未決定であった。
4. 自律性欲求では、「自己決定欲求」では決定群

4. 07(±5.69)、未決定群 3.92(±6.95)であった。「独立欲求」では、未決定群は 2.69(±6.82)、未決定群 2.94(±6.65)であった。
5. 進路意思決定上の困難さにおいては、決定群と未決定群の有意差が認められなかった。
6. 在学中に将来の自己像を描かせることや職業を通して社会にどのように寄与していきたいか等、職業観を持つことの意味や生き方についても考える機会をつくる等、キャリア教育の強化の重要性が示唆された。

Ⅷ. 本研究の限界と課題

本研究は、関東圏および東北地方の2つの看護大学の学生を対象としたため、一般化には限界がある。今後は、対象数を増やして実証的データの蓄積を行い、看護学生の自律性を高めるための方策を具体的に検討していく必要がある。

文献

- 安藤史高(2003). 自律性欲求とクリティカルシンキング志向性との関連. *こころとことば*, 2, 52-59
- 安藤史高(2007). 保育系短期大学生の就職動機づけに対して自律性欲求・進路変更が及ぼす影響, *一の宮短期大学紀要*, 46, 71-78
- 安藤史高(2008). 自律性欲求および進学動機づけと進学先自己決定との関連. *日本心理学会*, 72回大会, 1034
- 伊藤秀樹(1999). 大学生は『生徒』なのか - 大衆教育社会における高等教育の対象. *駒沢大学教育学研究論集*, 15, 103-106
- 鱸 幹八郎, 山本 力, 宮下一博(1996). *アイデンティティ研究の展望 I*. ナカニシヤ出版. pp. 154-155
- 厚生労働省(2011)看護教育の内容と方法に関する検討会報告書.
https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-isei_127329.html (閲覧日:2018年11月20日)
- 小林明子, 酒井美和(2006). 実践的ボランティア教育プログラムと参加型学習試案-大学生の主体性を引き出す教育実践を通して-. *福井県立大学論集*, 28, 87-108
- 鹿内啓子(2006). 大学生の職業決定に関わる要因の検討-未決定型による比較-. *北星学園大学文学部北星論集*, 42, 69-88
- 竹本ゆかり(2009). 看護学生のキャリア発達支援に関する研究-キャリアセミナープログラムの構築に向けて-. *北日本看護学会誌*, 12(1), 1-11
- 中新美保子, 谷原正江, 長江宏美, 大場広美, 太田にわ, 砂田正子, …福山礼子(2005). 看護学生の心理社会的発達 - 看護大学生・看護専門生・非看護系学生の比較 -. *川崎医療福祉学会誌*, 15(1), 289-293
- 永野仁, 根本孝, 木谷光宏(2001). 大学生の就職行動に関する調査結果報告書, *政経論叢*, 70, 127-145
- 西山智春, 大室律子, 鈴木良子, 合田典子, 細越幸子(2004). 看護学生の高等学校教育における進路決定に関する要因-1年次入学生の実態調査から. *看護教育*, 45(8), 717-721
- 古市裕一(1993). 大学生の進学動機と価値意識. *進路指導研究*, 14, 1-7
- 淵上克義(1984). 進学志望の意思決定過程に関する研究. *教育心理学研究*, 32, 59-63.
- 水落幸, 日下和代, 高橋ゆかり(2015). 看護学生の精神看護学実習前後における自律性の変化. *第45回日本看護学会論文集(精神看護)*, 45, 294-297
- 村中洋子, 浦島紀子, 青木涼子, 渋谷栄(2002). 看護学科学生の入学時における看護専門職志向の認識. *東海大学健康科学紀要*, 8, 105-113
- 望月由紀(2017). 大学等におけるキャリア教育・就職支援の現状と課題(1). *文部科学教育通信*, 421, 12-15
- 文部科学省(2008)中長期的な大学教育の在り方について(諮問),
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/08091607.htm (閲覧日:

- 2018年11月20日)
- 文部科学省(2011a). 大学における看護人材養成の在り方に関する検討会最終報告.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm(閲覧日: 2018年11月20日)
- 文部科学省(2011b) 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申),
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm(閲覧日: 2018年11月20日)
- 文部科学省(2011c) 予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(審議まとめ).
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1319183.htm (閲覧日: 2018年11月20日)
- 文部科学省(2012a). 中学校キャリア教育の手引き.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/1306815.htm(閲覧日:2018年11月20日)
- 文部科学省(2012b). 小学校キャリア教育の手引き(改訂版).
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/1293933.htm(閲覧日:2018年11月20日)
- 文部科学省(2017). 大学における教育内容等の改革状況について(平成27年度)
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1398426.htm (閲覧日:2018年11月20日)
- 山内栄子, 松本葉子, 山本雅子(2009). 現代の看護系大学生の学生生活における職業的アイデンティティの形成過程. 日本看護学教育学会誌. 18(3), 11-24
- 若松養亮(2001). 大学生の進路未決定が抱える困難さについて - 教員養成学部の学生を対象に -. 教育心理学研究. 49, 209-218

Abstract

This study identifies the relationship between the need for autonomy, career choice factors, and difficulties in career decision-making. A questionnaire survey of undergraduate nursing students was conducted immediately after enrollment, using the Need for Autonomy Scale (need for self-determination/need for independence) and the Career Decision-Making Difficulties Scale. The results showed: 1) students were influenced by parents, healthcare experiences such as illness or hospitalization of someone close to them, and encountering working nurses as vocational role models; 2) the motives were “obtaining qualifications” and “developing professional expertise;” 3) 66.7% of students planned to “enter the nursing profession” immediately after enrollment; 4) 49.2% of students had not decided upon a career after graduation and their “need for independence,” a refusal to be influenced by others and maintain a desire to be independent, was high; 5) the “need for self-determination,” that is, making behavioral decisions reflecting one’s own interests and values, was high in those who had decided upon a career path; 6) difficulties in career decisions, such as anxiety about skills, were identified as deterrents in students’ decision-making regarding career choices. Those who had not decided upon a career need to receive consultation on guidelines and decision-making in order to be aware of their problems. It is thus important to enhance career education by providing opportunities to consider the implications of various views on professions and ways of life, such as depicting a future self-image for the students and thinking about how they want to contribute to society through their occupations.